新潟大学国際センター紀要　第４号　77 - 81，2008年　　Journal of the International Exchange Support Center
2008, Vol. 4: 77 - 81, Niigata University

書評　『多民族社会の言語政治学』
―英語をものにしたシンガポール人のゆらぐアイデンティティ―

郭俊海・奥村みさ・江田優子ペギー著　ひつじ書房　2006年　2200円

柴田　幹夫*
（shibata@isc.niigata-u.ac.jp）

2008年３月に本学国際センターにシンガポール東南アジア協会及びシンガポール国立大学から数人の訪問客があった。本学では３月に学生を連れてシンガポールに研修に行く企画があったので、その打ち合わせを兼ねての訪問であった。東南アジア協会の人は、中国系であったけれども、全くと言っていいほど中国語（この場合は普通語のみならず、自分の原籍の言葉）を話すことができなかった。私にとっては中国系のいわゆる華人と呼ばれる人々のなかに、自分の故郷の言葉を話すことができない人がいるなんて不思議に思った。

この不思議を解消してくれそうな一冊の書物が私の書架に蔵されていた。『多民族社会の言語政治学』―英語をものにしたシンガポール人のゆらぐアイデンティティ―、である。本書は、以前新潟大学国際センターで同僚だった郭俊海先生（現九州大学留学生センター）が中心となってまとめられた著作である。郭先生はじめ著者の奥村みさ、江田優子ペギー氏もシンガポール国立大学で日本語を教えられた経験を持っておられる。この書物を紹介することによって不思議を理解しようと思った次第である。

目次に従って見ていこう。

はじめに
序章
第１部　シンガポールのバイリンガル政策
　第１章　教育システム－英語と華語教育を中心に
　第２章　シンガポールの英語史－言語政策との関連において
第２部　言語とアイデンティティ
　第３章　シンガポール人の民族的・言語的風景－学生たちへのインタビューから
　第４章　英語とアイデンティティ－華人系若者層を中心に
　第５章　華語とアイデンティティ

と言う構成になっており、シンガポールに関するコラムが適当に散りばめられている。

では序章から見ていくことにする。シンガポールを象徴するのは何と言っても「マーライオン」であろう。マーライオンは顔はライオン、胴体には鱗、そして大きな鰭を持つという。そのマーライオンの矛盾した姿は、まさにシンガポールの抱えている相容れない二つのアイ

* 新潟大学国際センター　准教授

デンティティを現しているのではないかと指摘しているが、ここで言う二つの相容れない事象とは、つまり言語と文化的アイデンティティの関係である。この問題を考えていこうとするのが本書のねらいであろう。

第１部、シンガポールのバイリンガル政策、第１章、教育システムでは、リー･クアンユーの「バイリンガル教育は簡単ではない。しかし、わたしたちにとっては必要不可欠である。理由は簡単だ。それはシンガポールの、アイデンティティ、文化、そしてサバイバルに欠かせないものだから、である」という言葉を紹介して、まず基本知識として、シンガポールにおける民族分布、言語分布を紹介している。さらに教育システムのなかでバイリンガル教育について詳しく論じている。バイリンガルとは、「母語のように二つ以上の言語を操る」とか「さまざまな場面で二つの言語をほぼ均衡に使える」という定義をしているが、現実的にはなかなか二つの言語を同程度に運用できないとされ、均衡バイリンガルはあくまでも理想的な到達レベルに過ぎないとされる。

シンガポールの場合は英語は教育上の第一言語とされ、第二言語には華語（中国語、この場合はマンダリン、いわゆる普通語を指す）、マレー語、タミル語がある。そういえばシンガポールの地下鉄では英語、華語、マレー語、タミル語で車内放送がされ、またバスの車内における表記も四つの言語であった。ここでは英語を主軸とするバイリンガル教育が打ち出されているのである。またリー・クアンユーの言葉を紹介しよう「われわれは、シンガポールという国で生きていかなければならない。英語を行政用語にしなければ、シンガポールはもしかすると分裂、衝突、そして滅びるかも知れない」というような強烈な危機意識が根底にあったのだ。さらに母語を考える上で、華人の話す方言（福建語、広東語、潮州語、海南語、上海語、福州語）やマレーやタミル語などにおいても多くの方言が存在しており、彼らの話す言葉がそのまま母語になると言うわけではなかった。その結果として英語が第一言語として採用され、第二言語は民族的、文化的ルーツを継承させるものとして位置づけられた。

シンガポールにおける英語教育が飛躍的に伸びたのは、寧ろ政策によるところが大きかった。1970年代の終わりごろまでは、シンガポール経済のサバイバル時期に当たり、国家の最大の関心事は、如何に教育を普及させ、経済を促進するかということにあった。政府は必死に外国資本や企業を誘致し、従来の労働集約型経済から、技術・知識集約型経済へと転換をはかり、シンガポールの工業化、近代化の実現を急いだのであった。このような政策の中で英語が第一言語として当然のように出てくるのであった。英語ができなければ、上級学校に進むことができないし、就職先の保証もないと言うことであろう。

次に華語教育を見てみよう。英語中心の教育体制であっても、シンガポールに住む大部分の人は華人であり、華語を話す人たちであることは言を俟たない。ここで言う華語とは、上述したように普通語を指す。そのなかで「華語普及キャンペーン」が行われ、ピンイン（中国語ローマ字表記法）が採用され、方言が追放され、中国で教員研修が行われ、またアナウンサーなどを中国大陸や、台湾から採用したりするなど、教育、マスメディア方面において華語教育普及キャンペーンが行なわれた。

第２章では言語政策との関連において、シンガポールの英語史を論じている。シンガポー

ルの英語といえば、シングリッシュ（シンガポール口語英語）が名高いが、ここでは時代を追ってシングリッシュの言語的地位を述べている。シンガポール開埠当時はイギリスの海峡植民地として、近隣諸国から多くの移住者が押し寄せた。その結果下級官吏が不足したので、英語を教育言語とする学校には援助を与えた。ただこの時期まだ英語を話す住民はごく僅かであったという。その上英語を話す人といっても千差万別であった。英語のノン・ネイティブスピーカーである宣教師のヨーロッパ人、インド人、セイロン人たちがシンガポールになだれ込んできたのである。こういうなかで現地での交易上の言葉はマレー語であったという（ピジン･マレー語　取引に使用されるマレー語の口語）。更に大多数の人数を占める華語との交渉などを通じて、多くの言語の融合がシングリッシュを生み出したと言っても過言ではあるまい。19世紀終わり頃から20世紀初頭、半ばにかけてシンガポールはゴムの集散地として大きく発展した。労働者が多く集まり、またからゆきさんと呼ばれる人たちも多く存在した。このあたりのことも少しは触れて欲しかった。

第２部は「言語とアイデンティティ」で、第３章、シンガポール人の民族的・言語的風景－学生たちへのインタビューからでは、大学生に実際にインタビューして、自分のアイデンティティを考えている。母語は華語、英語を第一言語というＡ学生に対しては、母語と第一言語のカテゴリー分けが意識的に行われないことを一つの特徴としている。我々日本人は母語と第一言語の境界がほとんど存在しないから、奇異に感じるかも知れない。学校内では当然ながら英語が使用されているし、華語を使うのは許されない風潮があるようだ。授業も英語で進められるのが当たり前である。

Ｂ学生は、華人社会で育っているが、英語ができなければいい職業に就けないと言って母親から英語の教育を勧められたと言っているが、華人や他の少数民族の場合は民族的アイデンティティよりも経済的な成功に重きを置いているように見えると指摘されている。このことを裏付けるように、最近では華語を学ぶインド系やマレー系の少数派の人たちも増えているという。

Ｃ学生は、華語は自分のアイデンティティに関係しているという。Ｂさんと同様に華人系家庭に育ったので、家庭内言語は中国語（福建語）である。しかし、大学では英語を話す。「英語はアカデミックな場所で使う言葉で、華語は友人と話す言葉であるという感覚」だという。また「華語は華人系のアイデンティティに関わっていると思う」とも言っている。シンガポールの光と陰は、英語を学べば学ぶほど、使用場面が増え、益々流暢になっていくが、その結果、人々の考え方や行動様式にまで、英語の裏に張り付いた西洋文化の影響が及んでくる。若者たちの間に西洋の文化が広まり、儒教をベースにした中国の伝統文化は失われつつあるのも確かであるといわれ、言語の使用と民族的価値観のバランスをどう取っていくかがシンガポールの恒久的課題であるといわれるが、まさにその通りであろう。

Ｄ学生は両親が客家（かつて中国の華北中原地方から南下してきた漢族の子孫として、他の漢族や少数民族とは区別されてきた集団のことを言う。独特の習俗や言語を持つ）であったため、客家語は理解できるが、話すことはないという。幼稚園から少数のインド系やマレー系の人たちと混じっていたので、英語は喋っていたという。Ｄさんはアイデンティティ

を個人的なものとしてとらえ、自分を規定するときに華人系であるかどうかは余り意識に上らないという。

Dさんのようにシンガポール国民として国家への帰属意識は明確にあるという。この場合アイデンティティに関わってくるのが、シンガポール英語である。ただ国家と言語は必ずしも一致しないので、国家の共通語、教育の媒介語、国民の共通語として認識されるのがシンガポールの英語であると結論づけられている。

次に第４章「英語とアイデンティティ」を見ていくことにする。英語に堪能な華人系シンガポール人は英語を話すがイギリス人ではない。「チャイニーズ」ではあるが中国人ではない。一体彼らのアイデンティティは何なのかをここでは問題にしている。

シンガポールは見ての通り、多民族国家、多言語国家である。この場合多民族社会を紐帯させる役割も持つ言語として英語が挙げられている。その効用として以下の二点を挙げている。①世界市場への参入が容易になること。②国民統合の言語としての効用。ただシンガポールの公用語は英語、華語、マレー語、タミル語が規定されているが、やはり人々をつなぐ言語としては英語が抜きんでている。各エスニック集団の言語、伝統文化を尊重するあまり、エスニック集団の内部への収斂力が強化され、集団間の差異が強調されすぎて、排他的になる場合もある。甚だしくは国家の分裂の危機を招きかけない。従って多民族主義を標榜する国家故に各民族間を紐帯する道具として英語があるというのである。それはまた国民意識形成にも大きな役割を果たしているという。

ただ著者は英語による国民文化形成は可能なのかということを考え「サイレント・マジョリティ」(文句を言わない　英語で文句が言えない　華語を話す77万人の低所得シンガポール人）の存在を挙げる。英語を中心とした文化が浸透すればするほど彼らは文化的にも孤独感を感じるという。多言語社会の一つの側面でもあると言う。

最後第５章「華語とアイデンティティ」では、シンガポールにおける華語の教育史を振り返っている。華人の移住についてはいつ頃から始まったかは諸説あるようだが、19世紀になり多くの華人が南洋に移住するようになった。初期の華人教育は「私塾」と「説書、講古（古代の物語を言い伝える)」という形式で始まったという。その後戊戌変法（本文では戊虚変法となっているが、明らかな誤植である）の首謀者康有為がシンガポールで学校を作り、標準的な官話教育を行ったことが、シンガポールにおける本格的な華語教育の始まりであるとされる。

華人社会で話される漢語の方言は実に10種類にも上るという。方言は早期にシンガポールに移住してきた華人の血縁、地縁を象徴するものであったという。居住エリア、職種などの生活のほとんどが方言による華人の分布を示しているという。その方言を支える組織として宗郷会館や宗郷公会などがあり、同郷人との交流を促進させ、互いに助け合う扶助組織として大きな役割を担っていた。現在では大別して広東系（広東、客家、潮州)、福建系（福建、福州、福清)、三江系（江西、江蘇、浙江）に分かれている。

自分たちの祖国を思いつつ、何時の日か帰郷する「落葉帰根」とその地を生まれ故郷と思い、骨を埋める「落葉生根」のグループに分かれたという。このような中で自分たちの身分

やアイデンティティに対する再認識が宗郷会館や宗郷公会で確認されるようになってきた。

シンガポールの独立後、シンガポール人としてのアイデンティティの構築が必要となってきたが、その結果として、方言の追放が始まった。「華語普及キャンペーン」である。その結果どうなったかはもう自明のことであろう。

以上簡単に紹介してきたが、全体としては非常にわかりやすく書かれているという印象であった。ただ三人の共著であったが故の問題もなかったわけではない。あとがきでも書かれているように、「筆者のバックグラウンドやシンガポールとの関わり方に相違があり、同じ事象を扱った場合でも解釈の仕方が様々である」とあるが、もう少し統一された方が読み手にとって親切であろう。また同じことが何回も言われているような感じがしたが、書評子の読み方が悪かったのであろうか。

欲を言えば、軍政下における日本語教育、例えば西本願寺が設立した日本語学校なども触れて欲しかったし、戦前の日本人社会の実態などについてもコラムでもよかったから一言書いて欲しかった。

最後に新潟大学では今年の３月に学生をシンガポール国立大学に派遣して、シンガポールにおける多文化共生社会の実態を見てきた。また来年以降このような交流が継続されるならば、必続の教科書として、この書物を推薦したい。